

川多き八百八町の切絵図より川を奪えり橋を奪えり

片山 紫

江戸の切絵図をうたう五首中の一首。川そして橋がたくさんある切絵図を見ながら、現在の東京には切絵図にある川も橋もほとんどがなくなってしまうことをなげきかつ告発している、そう読んでいいだろう。珍しい題材を見つけた取材感覚の良さに注目。なるほど、『鬼平犯科帳』等、江戸を舞台にした小説を読むと、運河を含めた川そして橋がたくさん出てくる。

アースドリル掘削機いま据えられて彼方に白き暑寒
別岳 菅野彰一

ビル建設の現場である。アースドリル掘削機はずいぶん大きなものらしい。そのアースドリル掘削機が手前にあって、その向こうに雪をいたたく暑寒別岳が見える、というのだ。自然と機械を表現してスケールが大きい。一連中に「……組み上げし我ら」とあるから現場で働いている作者らしい。

パレードの出発前に神々が車座になり弁当を食ぶ
西村三智

「神々が……」以下、一読して思わず笑ってしまふ。何かのイベントだろう。宮崎県在住の作者だから、登場するのは日本神話に出てくる神さまたちだろう。

あかあかと照りたる壁に手の平を押し受けてる日
の温かさ 松橋雅実

受けとっているのは太陽の温みである。秋の終わりの夕方の冷えた空気を思わせる独特のデリケートな表現に

短歌の現在

No.454

今月の15首を読む

佐佐木幸綱

注目した。玉葉集・風雅集を思い出させる表現の工夫が読める。

出番待つ所在なざげなホルン吹き金色の朝顔べんげんに頬を照らして 松岡秀明

出演前のオーケストラのホルン奏者をクロロズアツプした珍しい一首。ホルンをかかえて椅子に腰掛けしている場面だろう。「所在なざげな」が普通だが、現代口語を思わせる「所在なざげな」をあえて用いて、心理的距離の近い感じを出しているだろう。

晩秋の色のやうなる柿の実が三つ残りて木を照らしをり 三輪良子

秋の終わりの柿の木に実が三つ残っている、それだけの風景をていねいに表現して一首にしあげている。風もないようだし、人影もないようだ。読者は時間のすきまのような深い静寂を聞く。

神さまの預りものとして抱くまだ濡れてゐるほはほはの髪 桐谷文子

生まれて間もない孫をうたった一連のようである。この一首、生まれたばかりで、まだあまり実感のわかない感じがうまく出ていると読む。

幼稚園へむかふ親子とすれ違ふ母が待ちゐる家へゆくとき 古賀公子

高齢の母の家へ行く作者。すれ違った母と娘は、三十歳も四十歳も若い母と娘だったのだろう。入れ子構造の感じが表現されている。何気ない出合いながら、三十年昔、四十年昔の自分たち母娘がふと照らされた思い。